Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-04-30

伝統文化産業におけるキャリア形成と制度 : 京都花街の芸舞妓の事例

西尾, 久美子

(Degree)
博士（経営学）
(Date of Degree)
2006-03-25
(Date of Publication)
2008-12-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲3638
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003638

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

【 47 】

氏　　名・（本　籍）	西尾　久美子	（　滋賀県　）
博士の専攻分野の名称	博士（経営学）	
学　位　記　番　号	博い第143号	
学位授与の　要　件	学位規則第５条第１項該当	
学位授与の　日　付	平成18年3月25日	

【 学位論文題目 】

伝統文化産業におけるキャリア形成と制度
―京都花街の芸舞妓の事例―

審　査　委　員

主 査　教　授　金井　壽宏
教　授　加護野　忠男
教　授　桑原　　哲也

論文内容の要旨

本論文は、日本国内に複数存在していた花街のほとんどが産業としての競争力を失い寂れていった中で、なぜ京都の花街だけが芸舞妓という人材を育成し続け、産業として生き残ってきたのか、社会科学的な視点で探求するフィールドリサーチである。マクロ的には、コミュニティの側に制度的基盤があり、ミクロ的には、その制度的基盤のなかで、キャリア発達をしていく芸舞妓の技能獲得がある。つまり、「一見お断り」という規範で代表されるような京都の花街に独特の伝統的な制度、および京都の花街が有する芸舞妓という人材、これら二つに注目し研究がなされている。この両面を捉えるために、京都の花街でエスノグラフィックな手法を用いた調査が実施された。個人主義的な考え方を色濃く持つ現代の若者が、京都花街という伝統的な共同体の一員となり、その花街共同体のなかでキャリアを形成する過程を、エスノグラフィーからの生の声で、濃密な記述をすることにより、京都花街がその業界としての地位を長期間にわたり維持し、現在では世界的な知名度を保持している制度的基盤が解明されている。本論文はつぎのような構成になっている。

第一章では、研究の目的と問題意識が示されている。日本国内に複数存在した花街の歴史的な推移を記述し、他の花街と比較して京都の花街だけが伝統産業として存続してきた経緯を明らかにしたうえで、既存研究を踏まえた上で研究課題が提示されている。

第二章では、研究の方法と調査対象の選択、調査の解釈方法が示されている。調査対象へのアクセス方法、エスノグラフィーでは情報提供者（インフォーマント）とも呼ばれる調査協力者について言及されている。

第三章では、京都花街という特殊な調査対象の背景について記述がされている。調査対象の京都の花街は、これまでは詳しく、また正確には、その様子が一般に知られてはいないため、第四章と第五章の事例記述に先立ち芸舞妓や花街の歴史、花街の事業者などが概説されている。また、京都花街の業界規模の推計がなされている。

第四章では、ふたつの調査項目について、調査結果が報告されている。ひとつは、芸舞妓の育成は花街のどのような関係的な実践のなかで行われているか、という問いであり、この項目には、芸舞妓のキャリア形成を促進する要因、文脈についての記述が含まれる。もうひとつは、芸舞妓のキャリア・パスという調査項目である。これには、つぎのような問いが含まれる。芸舞妓のキャリアを支える技能とはどのようなものであり、その技能の育成はどのようにされているのか。芸舞妓のキャリア・パスはどのようなものか、技能とは何か、そしてその育成は花街の中のどこで誰がどのようにしているのか。また、技能を修得して仕事経験を重ね築かれていく芸舞妓のキャリアはどのように形成されていくのか。これらの事項について、キャリア形成を促進する要因や文脈にまで踏み込んで調査結果が提示されている。インタビュー調査だけでなく、舞妓の誕生と、舞妓から芸妓への変化の時期に立ちあった参与観察を実施し、調査フィールドの内部者の視点に基づく記述がされている。芸舞妓の人材育成にかかわる関係者を特定し、それぞれの役割と育成への具体的なかかわり方、人材育成が実際になされる場とそれぞれの関係者が育成にかかわる時間幅や育成役割の相対的な重要度等までが提示されている。

第五章も引き続き事例記述であるが、ここでは花街共同体にかかわるふたつの調査項目に関する記述がなされている。ひとつは、花街共同体のメンバーは誰か、という調査項目で、花街共同体における取引関係とはどのようなものであるか、その取引関係を維持・促進する要因、文脈は何なのか、という点についても記述がなされている。もうひとつは、花街共同体を支える制度的な要因は何か、というマクロ・レベルの問いであるが、制度と個人のキャリア形成にはどのような関係があるのかにも焦点を合わせることによって、マクロとミクロを架橋しながら、花街の事業システムについて記述がなされている。まず、花街らしいサービスを提供するために必要な関連業種を考慮し、第四章で記述した芸舞妓の人材育成にかかわる共同体のメンバーを含む、より広い範囲での花街共同体のメンバーは誰なのか、そのメンバー間の取引関係とはどのようなものか、またその取引関係を維持、促進する要因、文脈が明らかにされている。また、京都花街の芸舞妓という人材が、この共同体の取引システムの中でどのように評価されているかに関しても記述がなされている。さらに、京都花街共同体が維持されてきたことを支える制度的要因についても発見事実が整理され、花街共同体メンバー間の取引システムと、相互の評価のしくみ、および情報の共有を通じて花街共同体の存続が実現していることが示唆されている。

第六章は、第四章と第五章の発見事実に基づき、より総合的な観点から、京都花街におけるキャリア形成と制度との関係について考察がされている。ここでは、人材育成と制度と伝統文化、この三者の関連に注目し、文化が制度を支え、その文化を共同体のメンバーが共有することで制度が運用され、その結果、芸舞妓という花街に欠くことのできない人材が、花街の関係性の中で育成されていること、芸舞妓のキャリアが花街の制度に埋め込まれたものであることが考察されている。また、花街の事業システムにおいて、複数の制度が相互に関連性を持ち柔軟に運用されていることが、京都の花街に伝統と革新を両立させ、他の花街が衰退した現在でも、業界として生き残っているダイナミズムを生み出していることも明らかにされている。

第七章では、各章の骨子が要約され、研究の全般的な結論とともに、理論的・実践的含意が提示されている。さらに、今後の研究課題についても言及がなされている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、京都に残る日本文化の象徴的な存在であるとともに、女性の職業として長い歴史をもつ芸舞妓と彼女たちが生きる場の基盤として存在する制度に関する、本格的な社会科学的調査研究である。研究対象として通常は深くはアクセスしにくい花街に入り、しかも芸舞妓とその育成にかかわる関係者にインタビュー調査をし、彼らが集う場を参与観察する機会を創出して、組織エスノグラファーとしての調査研究が展開されている。その意味では、フィールドワークの報告書としてのエスノグラフィーそのものに価値があり、本論文での事例の記述そのものに、学問的な貢献が認められる。具体的には、つぎの五つの点に、本論文の主要な意義と貢献が認められる。

第一の貢献は、芸舞妓が花街という共同体に参加する過程を明らかにし、その促進要因として複数の制度とその制度間の関係を取り上げたことがあげられる。キャリア発達のみをもっぱら取り上げる研究では心理学的視点に偏りがちになる。本論文は、そのようなアプローチを内包しつつも、制度論的な視座を持ち込む新しいキャリア研究の流れを生み出すひとつの範例として貢献している。

第二の貢献は、歴史的に育まれてきた伝統ある仕事である芸舞妓のキャリア形成のプロセスと、そこにかかわる関係者の役割について、データそのものから花街を共同体としてとらえる見方に基づき、理論的な枠組みを提示することができた。その意味で本論文は内部者の生の声からできたグランデッド・セオリーの探求例という特徴を持つものである。

第三の貢献は、京都花街を事業システムとしてとらえ、その中で継続的になされている花街独特の制度の柔軟な運用について詳しく記述し、長期にわたって業界が維持されてきたことを、花街共同体・制度・伝統文化という関係から明らかにしている点があげられる。日本の伝統文化産業である京都花街における伝統と革新を生むダイナミズムは、その共同体に固有の制度を資源として環境の変化に柔軟に対応した結果である。そのダイナミズムが、長期に継続する事業システムの強さの源泉になっているという指摘は、さらなる検証を必要とはするものの、本論文の興味ある理論的な貢献となっている。

第四の貢献は、働きながら学ぶことの意味、芸舞妓を取り囲む関係者それぞれの育成の役割を強調しつつも、あわせて、学校の役割を再検討したことがあげられる。伝統技能そのものの習得は、若者にとっては自己の成長や発達、自身を確認するステップとなるが、同時に、伝統技能を身につけることで共同体への参加にもつながる。その共同体のなかに学校制度が存在するおかげで、若者に基本的技能を習得させる場が、実践の場と連動する。技能を発揮し、レベルアップを自覚できるような場は、いわばOJTの場にあるが、それだけで学びが完結するのでなく、学校制度と連携させるなかから、多くの関係者により鍛えられるOJTの場を積極的に確保していくことで、伝統文化産業における若者の人材育成がなされている姿がここに浮かび上がってくる。このことは、分野と伝統はまったく違うけれども、働きながら学ぶＭＢＡ教育のあり方に対しても含意をもたらす。

第五の貢献は、伝統的な分野における貢献だけではなく、一般企業組織へ参加する場合にも、企業組織へのコミットメントに対して不信を抱きやすい若者が、自己の関心として興味を持ちやすいスキルを磨くことから企業への参加意識を高めるような制度を作ることの必要性も、本論からの実践的含意として示唆できる。京都の花街では、芸舞妓のキャリア・パスが明確で、しかもこの共同体へ参加してからの時間と技能の達成目標は明確にされており、システム化されたコミットメントがだれの目にも明らかである。個人主義的な傾向をもつ現代の若者にとっては、自己の技能のあるべき到達目標が明確に分かり、それを到達する度に共同体へのコミットメントの形成をより自然に自覚できるようになっている。京都花街という共同体の中だからこそ成り立つシステムであるとも考えられるが、この流れに乗らないものは共同体の一員とは成れないルールは、共同体内における人材育成において無駄を作り出さない、ある意味ではより深く個人の能力やモチベーションを生かすシステムともなっている。

以上のような貢献が本論文にはある。しかしながら、どのようなすぐれた研究にも問題点があるように、本論文にも問題がないわけではない。

第一に、ミクロとマクロの両レベルのリンケージ、また、間にあるメゾ・レベルの解明は、まだ十分とはいえない。本論文は、芸舞妓と花街に関する組織エスノグラフィーをめざしつつ、同時に、キャリアというミクロの課題と、制度というマクロの課題の両方を照射しているが、両方の視点がどのように相互作用するのか、またその中間にあるメゾのレベルは、どのような役割を果たすのかについては、今後、さらなる調査を要するである。キャリアと制度という大きな２つの流れを統合するためには、その底流に流れるものを探求するための、より深い考察がほしい。キャリア論に制度論的アプローチが必要だと言われて久しいが、この方向をもう一歩深める努力を今後に期待したい。

第二に、研究方法として選択した組織エスノグラフィーの方法としての徹底の度合い、とりわけ、フィールドノートのコーディング、第一次的構成概念と第二次構成概念とのつながりの付け方については、さらに精緻化し洗練させる必要が残っている。日本の組織エスノグラフィーの乏しさと、存在しても本格的なレベルに至っていないのが現在の状況であるが、その限界を超えることも今後に期待したい。

第三に、コミットメントという概念に着目して結論的な考察をおこなっているが、その概念で論文全体を貫くような考察には至っていなことがあげられる。日本の伝統産業を取り上げながら、そこを理論的に彩る鍵概念としてそれを提示するのであれば、米国の研究ではコミットメントにあたるものを、フィールドの中のイーミックな言葉、第一次的構成概念としての大和言葉で言い換えることが、今後探索されてしかるべきである。審査委員の間でも、もっとコミットメント概念を全面そして前面に押し出すべきだとい

う評価と、もしも大和言葉にならないのなら、伝統産業の研究にそれを第二次的構成概念としてことさらに入れる必要はないのではないかという評価に分かれた。

しかし、以上の限界点の指摘は、本論文が困難な問題に挑戦したことを示すものであり、本論文に独自の貢献のもたらす価値をいささかも損なうものではない。また、限界点は、どれも今後の展開方向を示唆するものでもある。

以上の理由から、審査委員は、本論文の著者が、博士（経営学）の学位を授与されるに十分な資質を持つものと判断する。

平成１８年３月７日

審査委員　主査　教授　金井壽宏

教授　加護野忠

教授　桑原哲也